

有間皇子自傷歌群試論

——「自傷」の伝えるもの——

有間皇子自ら傷みて松が枝を結ぶ歌二首^註

岩代の 浜松が枝を 引き結び ま幸くあらば またかへり見

む (二・一四二)

家にあれば 筥に盛る飯を 草枕 旅にしあれば 椎の葉に盛

る (二・一四二)

この二首については、これまで多くの論が展開されてきた。第一首においては「ま幸くあらば」の理解、また第二首では「筥に盛る飯」は皇子の食事が神饌か、が解釈上の主な争点であり、そこに仮託・転用の問題が加わり、引き続きさまざまに論じられている。

本稿では題詞の「自傷」という表現に着目し、題詞筆者の伝えんとするところを読み解いてみたい。

小伏 志穂

「傷」は、集中に三十例見られる。

：待_レ我過_レ日、自有_レ傷_レ心之恨、望_レ我違_レ時、必致_レ喪_レ明之

泣。：(敬_テ和_テ為_レ熊凝_レ述_レ其志_レ歌_上 (八・八八六〜八九一)の序)

の序)

大原真人今城傷_レ借_レ寧_レ樂_レ故_レ郷_レ歌一首 (八・一六〇四題)

：干_レ時娘子、係_レ恋_レ傷_レ心、沈_レ臥_レ痼_レ疾。：(十六・三八一三左

注)

：或云、筑前国守山上憶良臣悲_レ感_レ妻子之傷、述_レ志而作_レ此

歌。：(筑前国志賀白水郎歌 (十六・三八六〇〜六九) 左注)

このような例から、「傷」は「かなしみで心がきずつく」ことを表

す時に用いられる語であるといえる。また

：於是、娘子傷_レ此易_レ別、嘆_レ彼難_レ會、拭_レ涕自吟_レ振_レ袖之
歌一。(六・九六六左注)

が「遊仙窟」の「所恨別易會難」に依っているとところから、「傷」は「嘆」や「恨」と親しい内容をもっているともいえよう。

「自傷」は万葉集中に二例みられる。

有間皇子自傷結_レ松枝_二歌_二首(二・一四一、一四二題詞)

柿本朝臣人麻呂在_二石見国_一臨_レ死時自傷_レ作歌一首(二・二二三)

題詞)

この二つの「自傷」は、伊藤博士の

(卷二挽歌の) 原撰部は有間皇子自傷歌群で始まり、人麻呂自傷歌群で終っている。

との指摘があるように、何らかの呼応関係を認め得る。柿本人麻呂自傷歌は仮託されたものという見方が一般的であるが、何にせよ「死に臨んで妻との別れを悲しんで歌った」作歌事情は、題詞と歌からみて明白である。そしてこのことから有間皇子自傷歌を考えた場合、こちらも、斉明四年の牟婁湯護送時の死に臨んでの作ともいわれる。また逆に有間皇子が刑死であることから、人麻呂も刑死であったと考える論もある。しかし、両方の題詞を比較すると、人麻呂自傷歌の方には「臨死」という語が見られる。これは、「自傷」

だけでは死期が近付いている状態を表現するには不十分であること
を示していると推察される。「自傷」歌を死と関係付けるために、
他の語を補ったのであろう。人麻呂は死に臨んで自ら傷んで歌った
が、有間皇子の場合は「自傷結松」とあるので、その傷みはむしろ
死とは無関係であった、と「自傷」と死とを積極的に切り離すこと
を考えた。

二

「自傷」使用例が万葉集以外の和文獻には見出し得ないため、漢籍に用例を求めることで、その表現にアプローチしたい。まず、

「自傷」使用例を漢籍に求めた先学_註に、古くは岸本由豆流「万葉集攷證」がある。

史記蘇秦傳に、出游數歲、大困而歸、兄弟嫂妹妻妾竊皆笑之、
蘇秦聞之、而自傷、乃閉_レ室不出、出_レ其書、偏觀之云々とあ
る、自傷と同じく、かなしむ意也。考に、かなしみてとよまれ
しもあたれり。(A)

遊学の後困窮しきって帰ったことを、まともな仕事をしないからだ
と兄弟などから笑われたので、蘇秦は「自ら傷んだ」のである。山
田孝雄「萬葉集講義」も同じく「史記」を挙げて注している。また、
黒田徹氏は「文選」にみられる例を検討し、

いずれも刑死につながるものではなく、また、刑死ということ
が、はっきりしている大津皇子の歌の題詞には「自傷」とは言っ
ていないので、「自傷」は刑死の表現と考えることはできない
だろう。

と梅原猛・中西進両氏の人麻呂刑死説を否定した。本稿では今少し
範圍を広げて用例を求め、刑死説否定のほかに「自傷」をよみとる
手掛かりを得たい。黒田氏も既に指摘しておられるように、「文選」
中の「自傷」は次の六例である。

…誼既以_レ謫居_レ長沙。長沙卑濕。誼自傷悼、以爲壽不得_レ長、
適爲_レ賦以_レ自廣。…(B・賈誼「鵬鳥賦」序)

…譬_レ日及之在_レ條、恆雖_レ盡而弗_レ瘳。雖_レ不_レ瘳其可_レ悲、心惻
焉而自傷。…(C・陸士衡「歎逝賦」)

…延州協_レ心許、楚老惜_レ蘭芳。解_レ劍竟何及、撫_レ墳徒自傷…
(D・謝靈運「廬陵王墓下作」)

家本秦川、貴公子孫。遭_レ亂流寓、自傷情多。(E・謝靈運「王
粲」序)

…鍛_レ翻由時至、感_レ物聊自傷…(F・鮑參軍「昭」戎行)
…至於臣者、人道絶_レ緒、禁_レ固明時。臣竊自傷。…(G・

曹子建「求通親親表」)

また、「玉台新詠」には

昔漢成帝班婕妤、失_レ寵、供_レ養於長信宮。乃作_レ賦自傷、并
爲_レ怨詩一首。(H・班婕妤「怨詩」序)

…厠_レ比醜陋質、徒倚無_レ所_レ之、自傷失_レ所_レ欲、淚下如_レ連絲
(I・繁欽「定情詩」)

…春榮隨_レ露落、芙蓉生_レ木末、自傷命不_レ遇、良辰永乖別、已
爾可_レ奈何、譬_レ如_レ紉素裂…(J・「朝時篇」怨歌行)

の三例、「芸文類聚」には

班婕妤自傷悼曰、…(K・人部・怨)

がみられる。史書においては先に示したAの他、同じく「史記」に

…其少女緹縈、自傷泣、乃隨_レ其父_レ至_レ長安、上書曰、妾父
爲_レ吏、齊中皆稱_レ其廉平。今坐_レ法當_レ刑。妾傷。…(L・「孝

文紀」第十)

…居數年、懷_レ王騎墮_レ馬而死。無_レ後。賈生自傷_レ爲_レ傳無_レ狀。…
(M・「屈原賈誼列伝」第二十四)

…及_レ中尉至。即賀_レ王。王以_レ故不_レ發。其後自傷曰。「吾行_レ
仁義、見_レ削、甚耻_レ之。」…(N・「淮南衡山列伝」第五十八)

「漢書」に

…誼既以_レ適居_レ長沙、長沙卑濕、誼自傷悼、以爲壽不得_レ長、
適爲_レ賦以_レ自廣。…(O・「賈誼伝」第十八)

…梁王勝墜_レ馬死、誼自傷_レ爲_レ傳無_レ狀、常哭、後歲餘、亦死。…

(P・「賈誼伝」第十八)

…趙氏姉弟驕妬、健仔恐_レ久見_レ危。求_レ共養太后長信宮、上許焉健仔退_二處東宮_一、作賦自傷悼…(Q・「外戚伝」第六十七下)

〔後漢書〕に

…及_二黨事起_一、奉乃慨然以疾自退。追愍_二屈原_一、因以自傷、著_二感騷三十篇_一、數萬言。…(R・「楊李翟應霍爰徐列伝」第三十八)

さまざまな悲しみの表現として「自傷」が用いられている様子がうかがえよう。このうち「死」とは全く関係のない内容の例としてA・E・F・G・H・I・J・K・N・Q・Rが挙げられる。Eは王粲の不幸な境遇を、Fは従軍時の寒さ厳しき様を、Gは臣が兄弟親族の自由な訪問が禁じられたことを、H・K・Qは班婕妤が寵愛を失って長信宮に退いたことを、それぞれ悲しんでいる。Iは、相愛の男女が会う約束をしていながらついに果たし得なかった悲しみを女の側からのべたもの。Jは、不幸にして夫と別れた女が、自分の運命のはかなさを傷んだもの。この作には班婕妤の「怨詩」(H)に拠る表現もみられる。Nは淮南王が封土を削られたことを嘆いたもの。またRでは、官を退いた応奉が屈原を追愍して我が身を悲し

んでいる。

死に関係する悲しみの表現に用いられた「自傷」をみると、まずB・Oは左遷の身となって長沙に住む賈誼が、このような不健康な地においては到底長生きはできまいと嘆いたものである。Cは命がいつ尽きるかを知ることができないのが悲しいというもの。Dは故人の墓を撫でて嘆き悲しんだ様子。Lは、法にふれて刑に処せられることになった父を思う娘の嘆き。M・Pは、王が落馬して亡くなったことについて、自分という傳がありながらむざむざと死なせてしまった悲しみを「自傷」という語を以て表現している。これらはいずれも「死」によって喚起される悲しみではあるが、Lを除く十七例は、牟婁湯護送時の有間皇子のように刑死への不安を抱えているわけでも、また柿本人麻呂のように「臨死」という状況に陥っているわけでもない。よって、「死」への悲しみを「自傷」と表現した例がみられるものの、それらを有間・人麻呂の悲しみに当てはめて理解することはできないと思われる。

以上の十八例により、「自傷」が臨死にかかわる悲しみのみの表現に限られないことが確認された。よって、「自傷」の一語故に有間皇子が松の枝を結んだ時の心情に斉明四年の事件の影を見るのは、早計であるといえる。つまり「自傷」は命の差し迫った状態を表現し得ない語であるから、題詞筆者は、少なくとも「自傷」を以て有

間皇子作歌を斉明四年の事件と結び付けようという意図は持つていなかったのではなからうか。むしろ有間皇子作歌を挽歌部に分類した点にこそ、万葉人の有間皇子への同情を読み取るべきであろう。

さて、これまで「自傷」が死のみにかかわる悲しみの表現ではないことを中心に述べてきたが、改めてA乃至Rの「自傷」の意味を整理すると、「当人には原因がないにもかかわらず、何らかの外圧によって望ましくない状況に陥る運命となったことに対して嘆き悲しむ」意といえる。有間皇子作歌の「自傷」については後述するが、ここでまず人麻呂自傷歌における「自傷」を考えると、IやJのように、やむなく愛する者と別れるという不運にみまわれたことに対する悲しみの表現といえる。

三一

次に、A―R中の、有間皇子同様「自傷」なる思いをもって何らかの作品をものした人物に注目しよう。その人物とは、班婕妤(H・K・Q)、賈誼(B・O)、応奏(R)の三者である。

班婕妤は『漢書』外戚伝によれば、古礼にのっとった進見をする立派な女性であった。はじめ成帝に大いに寵愛されたが、後に趙飛燕姉妹に寵が移り、次第に進見することも稀になる。姉妹の讒言を一旦は逃れたものの、嫉妬深い彼女らのこと、いつまた陥れられる

ともしれず、自ら長信宮の太后に仕えることを願ひ出る。その、退去の際に自ら傷んで賦を作ったのである。賈誼は年少ながら諸家の書に通じており、文帝に召され博士となった。しかし群臣らの讒言に遭い、長沙王の太傅となる。ある日部屋隅に鵬(不吉な鳥とされてきた)が止まる。長沙は低地で湿気が多い。自分は到底長生きできまいと思ひ、「自傷」して賦を作つて慰めた。応奏は桓帝に仕えた。かつては田貴人を皇后に立てようとした帝を戒め、帝もそれをきき入れたということもあつた。だが、党固の禁に遭ひ退いた。その時屈原を追慕して「自傷」し、彼の「離騷」に対して自分は「感騷」三十篇を作つたのである。

右の三者に共通する事柄は、取り分けて優秀ではじめ帝に重用されていたが、後に当人には特に非もないのに(班婕妤と賈誼の場合には讒言によつて)疎まれるようになり、退いて「自傷」し、賦を作つて自身を慰めたということである。抵抗する様子もなく潔く表舞台を去つた彼らの自傷賦に述べられたものは、万物の変化に身を任せ、新しい場所で生きてゆくことである。また、応奏が追慕したという楚の賢臣屈原については、賈誼も、長沙に赴く際鬱屈した胸中に思ひ出し、弔いの賦を作つている。屈原とは、忠を尽くし智を傾けて君主に仕えたがやむなく退けられた者にとつて、親しく追想するに値する人物だったのである。また『史記』屈原伝には

信而見疑、忠而被謗。能無怨乎。屈平之作「離騷」、蓋自「怨」出也。

と見えて彼の「離騷」は怨みから出たものであると分かり、班婕妤の賦は「芸文類聚」「怨」部に見出される。このことと先に指摘したように「傷」が「恨」などとも通じるものがあることを考え合わせれば、「自傷」して成した作品には「怨」なる思いも込められているといえよう。

三一—

さて、有間皇子の伝記を『日本書紀』^註によって確認しよう。

(大化元年) 元の妃、安倍倉梯麻呂大臣の女を小足媛と曰ふ。

有間皇子を生めり。

(大化五年) 三月の乙巳の朔辛酉に、安倍大臣薨せぬ。

(白雉五年) 冬十月…天皇、正寝に崩りましぬ。

(斉明三年) 九月に、有間皇子、性黯くして陽狂すと、云云。

牟婁温湯に往きて、病を療むる偽して來、國の體勢を讚めて曰はく、「纔彼の地を觀るに、病自づからに蠲消りぬ」と、云云。天皇、聞しめし悦びたまひて、往しませて觀さむと思欲す。

(斉明四年) 十一月の庚辰の朔壬午に、留守官蘇我赤兄臣、有間皇子に語りて曰はく、…是に、皇太子、親ら有間皇子に問ひ

て曰はく、「何の故か謀反けむとする」とのたまふ。答へて曰さく、「天と赤兄と知らむ。吾全ら解らず」とまうす。…有間皇子を藤白坂に絞らしむ。

先に述べたように、私見は、有間皇子作歌を「自傷」の一語故に斉明四年と結び付けることはできないとするものである。よって作歌時期として想定されるのは、斉明三年となる。この時の有間皇子が、「自傷」と表現されるにふさわしい状態であったか、検討しよう。

斉明三年の記事にみられる「陽狂」とは、「懷風藻」^註に

智藏師者。俗姓禾田氏。淡海帝世。遺學唐國。(略) 學業穎秀。同伴僧等。頗有忌害之心。法師察之。計全軀之方。

遂被髮陽狂。奔蕩道路。

とあるように、秀でた者が、周囲から妬まれ害される危険性のある我が身を安全にするために狂人のまねをすることである。有間皇子がいつから「陽狂」していたかは記されていないが、おそらく有力な後ろ盾であった祖父安倍倉梯麻呂・父孝徳帝が相次いでなくなり、中大兄皇子が権力を掌握しはじめたころからであろう。孝徳帝の唯一の皇子という高貴な人物でありながら、彼は長く孤立無援の時を過ごしてきた。当人に非があつたわけでもないのに朝廷へ出社することもままならず、鬱屈した日々であつたろう。ところが、周囲の状況は何ら変わっていない——むしろ中大兄皇子の権力は増大しつ

つある——にもかかわらず、有間皇子は保身のための「陽狂」を突然止めてしまふ。病が癒えたと報告し、自らを欺くような生き方を止めた有間皇子の姿に、題詞筆者は「自傷賦」を残した人々の生きざまを見たのではないだろうか。

四一

「自傷」を以上のように理解した上で有間皇子作歌を解釈しよう。第一首の解釈の争点は第四句目「ま幸くあらば」にある。この句と題詞の「自傷」を考え合わせ、有間皇子の刑死への不安と松の枝結びに託したわずかな希望を読み取ることが繰り返し論じられてきた。しかし本稿では、有間皇子作歌は斉明三年作であるという立場をとるため、「ま幸くあらば」を刑死と結び付けては理解し得ない。

「幸く」は集中に

楽浪の 志賀の唐崎 幸くあれど 大宮人の 船待ちかねつ

(一・三〇・柿本人麻呂近江荒都歌)

…直泊てに 御船は泊てむ つつみなく 幸くいまして はや
帰りませ(五・八九四・山上憶良好去好来歌)

命を 幸く良けむと 石走る 垂水の水を むすびて飲みつ
(七・一一四二)

と使用され、自然にも人事にも無事・健在で、の意と理解できる。

また松の枝を結ぶ行為は

たまきはる 命は知らず 松が枝を 結ぶ心は 長くとそ思ふ

(六・一〇四三・大伴宿禰家持)

八千種の 花はうつろふ 常盤なる 松のさ枝を 我は結ばな

(二十・四五〇一・大伴宿禰家持)

の例から、幾代を経ても変わらずにある松に願いを込めて行うものといえる。題詞筆者はこの有間皇子の行為を、「自傷」なる思いを持って行ったと表現した。よって、一四一番歌の「またかへり見む」に込められた願いは、岩代・牟婁湯といった紀伊路への別途の旅である。またその願望を結び松に託したのは、陽狂することを止めた自分が果たして無事で旅などをできる身でいられるだろうか、という将来の立場への不安によるといえる。不本意な待遇を受けつつも帝への忠誠心は失わず、万物の変化に身を委ねて生きた班婕妤や賈誼・応奉という人物の心情を表現してきた「自傷」の一語は、有間皇子の心情をも十分に伝え得るものである。

四一二

第二首は神饌説と食事説の両説がおこなわれ、未だ決着をみていない。しかしいずれにしても、「自傷」は死とは直結しないものと理解し、また作歌年時を斉明三年とみる本稿においては、命の幸く

あらんことを岩代の神に祈つたとは読み得ない。そこで、神に旅の安全を祈願したのか、あるいは食事の不便を歌ったものが問題となる。これについて、一連の歌群における一四二番歌の立場から検討したい。

長忌寸奥麻呂、結び松を見て哀咽する歌二首

岩代の 崖の松が枝 結びけむ 人はかへりて また見けむか

も(二・一四三)

岩代の 野中に立てる 結び松 心も解けず 十思ほゆ十思ほゆ(二・

一四四)

山上臣憶良の追和する歌一首

翼なす あり通ひつつ 見らめども 人こそ知らね 松は知る

らむ(二・一四五)

右の件の歌どもは、柩を挽く時に作る所にあらずといへど

も、歌の意を准擬す。故以に挽歌の類に載せたり。

大宝元年辛丑、紀伊国に幸せる時に結び松を見る歌一首

定本朝臣人部吉麻呂集の中に出た。

後見むと 君が結べる 岩代の 小松が末を また見けむかも

(二・一四六)

右四首は、いずれも有間皇子作歌と彼の事件を前提として生まれた作である。また、これらはみな詞句の上で有間皇子作歌の第一首目

の方を意識している。各々の題詞によれば、憶良作の一四五番歌を除き、三首は実際に岩代の松を見ての作である。現地に赴き、かの皇子が再会を期した松はこの松であろうかと感慨に耽り、松を題材に歌った長忌寸吉麻呂や人麻呂歌集歌作者は、何故に一四二番歌を前提とする歌を残さなかったのであろうか。それは、一四二番歌に歌われた「椎の葉に盛る飯」が、後の人々が有間皇子を想起する契機とはなり得なかつたためではなからうか。

仮に一四二番歌の理解において神饌説を採り、「飯」が岩代の神への供物であったとするならば、後の通行人等も当地で献げ物をし、それによって有間皇子を追想することも可能であつたらう。しかし、神への供物が歌われることはなかつた。よつて一四二番歌の「飯」は旅中の食事であり、一回性の強い素材であつたため、意吉麻呂たちもそれによって有間皇子を追想することはなかつたと考えられる。松が、後の人々が訪れた際にも変わらぬ姿でそこにあり、有間皇子を「偲ぶよすがとなり得たのに対して、「椎の葉に盛る飯」はそれに追隨する歌のないことから、岩代での風習ではなく有間皇子の個人的な食事とみたい。

時代は下るが、『明月記』に熊野詣の岩代王子が「御小養の御所」と記されていることをも考慮すると、旅の休息に適した多少のひらけた土地があり、斉明四年行幸時の中皇命一行や有間皇子もそこで

小休止、あるいは食事などを取ったことが想定できる。歌作はその

折に偶発的になされたものであろう。また、中皇命作歌

君が代も 我が代も知るや 岩代の 岡の草根を いざ結びて

な(一・一〇)

とあいまって、「結ぶ」行為が岩代での固有の風俗のようにもいわれるが、他に草を結ぶと歌ったものは

近江の海 湊は八十ち いづくにか 君が舟泊て 草結びけむ

(七・二二六九・鶴旅作)

妹が門 行き過ぎかねて 草結ぶ 風吹き解くな またかへり

見むへ一に云ふ、「直に逢ふまでに」(十二・三〇五六・寄

物陳思)

の二例、松を結ぶというものは前掲の家持作歌の二例が見られ、いずれも岩代とは無関係である。有間皇子の岩代での結び松は、「自傷」という彼固有の心情を以て行われた。また、そこでの旅中ならではの食事法に興を覚えての作歌にも浮いたところの感じられないのは、「自傷」の一語によって表現された、真率な生き方を採ほうとしている有間皇子の未来に差す影と、忠誠心を誓いつつも「怨」「恨」などにも似た思いを抱かずにはおられない境遇によるものである。

五一—

最後に、当歌群の形成について言及したい。

まず長忌寸意吉麻呂作歌は、彼が大宝元年の紀伊行幸に従駕していたらしいこと（註）から、その折の作と考えられる。いわゆる有間皇子事件から四十三年を経て、意吉麻呂は皇子がどのような最期を遂げたかを承知していたであろう。有間皇子は、斉明四年の護送の際に往路・帰路の二度岩代を通過しており、当然例の松をも目にししたと思われる。しかしその心境はかつて願った別途の旅での「かへり見」とはほど遠く、その意味において決して「また見」たと言えるものではない。意吉麻呂は有間皇子の不本意な「かへり見」を思いやって一四三番歌で「また見けむかも」と歌ったのであろう。一四四番歌は歌の脚注に「未詳」とある。一四三番歌が有間皇子作歌に寄り添う内容であったのに比べ、一四四番歌では「野中に立てる 結び松」「心も解けず」と、同作者の同時作であることが疑われるような句がみられる。しかし数々の宴席歌や「風莫の 浜の白波」(九・一六七三)などの歌いぶりを考慮すれば、いかにも意吉麻呂らしい表現といえ、「未詳」なのは作者ではなく当歌の伝承であったと思われる。持

山上憶良の追和歌は、意吉麻呂作歌第一首目に和した歌と解釈で

きる。題詞に「追和」とあることと、大宝元年は第七次遣唐使の待機中であつたことを考えると、憶良は紀伊行幸には従つておらず、何かの機会に意吉麻呂の歌を見て自らも作歌したのであろう。当歌は一四三番歌の「人はかへりて また見けむかも」に非常に親しく応じているが、一四四番歌に対しては答えていないようである。渡辺護氏は

亡靈という想定をもちこんで、それが目には見えず、人ならぬ身は松を解くことができないことを承知した、合理による一首である。

と解釈しておられるが、「未詳」なる注記を尊重し、憶良は一四四番歌を見ていないと考えるのが自然である。

一四六番歌は題詞によれば大宝元年紀伊行幸時の作である。多く指摘されているように、別に伝わっていた作を後に追補したものであろう。有間皇子自傷歌に始まる一連の歌群はこれを以て閉じられる。大宝元年以降の紀伊行幸では玉津島までしか出かけておらず、もはや岩代での作歌の機会はなかつたようである。

五二一

さて、以上の歌群構成をみると、伊藤博士氏が呼応関係を指摘された「人麻呂自傷歌群」が思い出される。

柿本朝臣人麻呂、石見国に在りて死に臨む時に、自ら傷みて作る歌一首

鴨山の 岩根しまける 我をかも 知らにと妹が 待ちつつ在るらむ (二・二二三)

柿本朝臣人麻呂の死にし時に、妻依羅娘子が作る歌二首

今日今日と 我が待つ君は 石川の 貝にへんに云ふ、「谷に」交じりて ありといはずやも (二・二二四)

直に逢はば 逢ひかつましじ 石川に 雲立ち渡れ 見つつ偲はむ (二・二二五)

丹比真人美けたり、柿本朝臣人麻呂が心に擬して、報ふる歌一首
荒波に 寄り来る玉を 枕に置き 我ここにありと 誰か告げ

けむ (二・二二六)
或本の歌に曰く

天離る 鄙の荒野に 君を置きて 思ひつつあれば 生けるともなし (二・二二七)

右の一首の歌は、作者未詳。ただし、古本この歌を以てこの次に載せたり。

まず傷まれるべき当事者の歌があり、それに和する歌二首が続く。

三首目「我ここにありと 誰か告げけむ」は先行の二首のうち、特に第一首目の「貝に交じりて ありといはずやも」に親しく応えて

いる。そして歌群は、別伝の歌が追補されて終わる。この構成は有間皇子自傷歌群に同じである。二二七番歌左注に拠れば、人麻呂自傷歌群の方は、かなり早くから今見るような構成をもっていたようである。一方有間皇子自傷歌群は、原資料に拠るとの注記もないまま、疑問を抱かずにおられない構成となっている。作歌年次を優先すれば一四三番歌の前か一四四番歌の次に置かれるべき一四六番歌が、いかにも追補であるといわなければかりの位置に存在していること、また、一四四番歌が「未詳」と注記せねばならぬほどの不確実性をもちながらも「長忌寸意吉麻呂哀咽歌二首」の一首と記録されていることを考慮すると、ある時期『万葉集』挽歌部の冒頭と巻末の役割を果たしていた二つの自傷歌群は、意識的に同一の構成をもたされていったものと思われる。有間皇子自傷歌は、挽歌部の冒頭歌としては、雑歌・相聞両部立の冒頭歌に比して新しい歌で見劣りするものであるとも言えるが、巻末歌群と対応する歌群を形成することで冒頭歌としての權威を保ち得たのであろう。

五十三

現在見られる有間皇子自傷歌群から知られるのは、少なくとも長忌寸意吉麻呂は有間皇子作歌を承知しており、また山上憶良は有間皇子作歌と共に意吉麻呂作歌第一首目を享受し得たということであ

る。つまり、当歌群は憶良によって一時的に形成されたといえる。有間皇子作歌に「自傷結松枝」の題詞が付されたのは、憶良の手控えに一四一・一四二・一四三・一四五番歌が並んだ時ではなかつたろうか。

次の資料をもとに、一四一・二二三番歌の「自傷」を除く集中の「傷」使用例二十八例を改めて検討しよう。

巻・歌番号・使用箇所	使用例	使用者
一・八・左注	製「歌詠、為之哀傷」也	山上憶良
一・二三・題詞	人哀傷作歌	
一・二四・題詞	麻統王聞之感傷和歌	
一・三三・題詞	高市古人感傷近江旧堵	
二・一六五・題詞	大采皇女哀傷御作歌	
二・一六六・左注	路上見花、感傷哀咽	
二・一七一・題詞	舍人等憫傷作歌	
二・二〇三・題詞	遥望御墓、悲傷流涕	
三・四一五・題詞	見竜田山死人「悲傷	
三・四二三・題詞	山前王哀傷作歌	
三・四四二・題詞	悲「傷臍部」王歌	
三・四六二・題詞	大伴宿禰家持悲「傷亡妾」	
三・四八一・題詞	悲「傷死妻」作歌	

↓	五・八〇六・題詞	復傷 _レ 抱 _レ 梁之意 _一	大伴旅人
↓	五・吉田宜書簡	懷古旧 _二 而傷 _レ 志 _一	吉田 宜
↓	五・八八六・序	自有 _レ 傷 _レ 心之恨 _一	山上憶良
↓	六・九六六・左注	娘子傷 _レ 此易別嘆 _レ 彼難 _レ 會	
	六・一〇四四・題詞	傷 _レ 借 _レ 寧 _レ 染 _レ 京 _レ 荒 _レ 墟 _一 作歌	
	六・一〇五九・題詞	春日悲 _レ 傷 _レ 三 _レ 香 _レ 原 _レ 荒 _レ 墟 _一	
	八・一六〇四・題詞	傷 _レ 借 _レ 寧 _レ 染 _レ 故 _レ 鄉 _一	
↓	十六・三八一三・左注	係 _レ 恁 _レ 傷 _レ 心、沈 _レ 臥 _レ 痾 _レ 疾 _一	
↓	十六・三八七〇・左注	悲 _レ 感 _レ 妻 _レ 子 _レ 之 _レ 傷 _一 、述 _レ 志 _一	
	十七・三八九〇・題詞	悲 _レ 傷 _レ 羈 _レ 旅 _レ 、各 _レ 棟 _レ 所 _レ 心 _一	(家持)
	十七・三九五七・題詞	哀 _レ 傷 _レ 長 _レ 逝 _レ 之 _レ 弟 _レ 歌 _一	大伴家持
	十七・三九五九・左注	遙聞 _レ 弟 _レ 喪 _レ 、感 _レ 傷 _レ 作 _レ 之 _レ 也	大伴家持
	十七・三九六四・左注	臥 _レ 病 _レ 悲 _レ 傷 _レ 、聊 _レ 作 _レ 此 _レ 歌 _一	大伴家持
	十九・四二三六・題詞	悲 _レ 傷 _レ 死 _レ 妻 _レ 歌 _一	(家持)
	二十・四四七七・題詞	四方女王悲傷作歌	(家持)

歌中には一度も使用されていないため、「傷」字使用者はほとんどが該当巻の題詞及び左注筆者となる。八番歌の該当部分は「類聚歌林」の引用にあたるので憶良によるものとみた。また、巻十七以降は家持によるとみてはば間違いない。巻三においても家持の影響の強い後半部に集中して使用例が見出せ、これらも彼によるもの

と考えられる。

ところで、「傷」が他の感情を表す語と共に用いられている例は、「悲傷」十例、「哀傷」五例、「感傷」四例、「傷借」二例、「慟傷」一例である。また「自ら傷む」のように「傷」単独で心の傷みを表現したもの（右表の欄外上部に↓を付した）も見え、それは巻五・八〇六・吉田宜書簡・八八六、巻六・九六六、巻十六・三八一三・三八七〇の六例ある。巻五は、周知の通り憶良・旅人を中心としたいわゆる筑紫文学圏の産物であり、巻六・巻十六はその編者として家持が擬せられるところである。したがって、「傷」字によって悲しみにうちしおれた心情を表現することは、主に彼等の間で行われていたといえよう。

また、先にみた班婕妤・賈誼・応奉の「自傷賦」の存在は、史書に通じておれば当然心得ていたはずである。特に班婕妤は、「遊仙窟」に

下官當見此詩、心膽俱碎、下床起謝曰、向來唯觀_レ于娘面、如今始見_レ于娘心。足使_レ班婕妤扶_レ輪、曹大家閣_レ筆。豈可_レ同年而語、共代而論_レ哉。

と、十娘の素晴らしさを表現するための譬え（あの立派な班婕妤という女性も、お車を押す役がいいところですよ）として用いられている。このような表現が成立するところから、当時その名と共に彼女

の伝記も知られていた様子がかがえ、「自傷」なる表現の着想は、おそらくこの辺りから得たものであらうと思われる。

有間皇子自傷歌群に係わつたとみられる山上憶良の「傷」字使用例に着目すれば、大伴熊凝追悼歌の序に

…但我老親、並在_レ庵室。待_レ我過_レ日、自有_レ傷_レ心之恨、望_レ我違_レ時、必致_レ喪_レ明之泣。…(五・八八六序)

とある。帰らぬ自分の帰りを待つて日を過こしたら、あまりの無念さに心を傷る恨みがあるだろうというのである。このような「傷」の使用法は「悲傷」「哀傷」などとは明らかに異なり、班婕妤の自傷賦を「芸文類聚」「怨」部に分類するような漢籍からの影響がかがえる。「自傷」の一語を有間皇子に捧げた題詞作者として、山上憶良を想定できる可能性も指摘しておきたい。^{註2}

以下、小稿において考察してきたところを簡潔に摘要して結びに代えたい。

これまで有間皇子自傷歌については、題詞の「自傷」を斉明四年の事件と結び付けて解釈することで一定の成果を得ている。それを本稿では、何らかの呼応関係が認められる二か所に現れた特別な表現とみ、題詞筆者がこの語で有間皇子作歌の何を伝えようとしたのか、という方面から考察し、以上の結果を得た。また同時に、前半に指摘したような漢籍に着想を得ての使用語と考えれば、集中で

「傷」字によって心の傷みを表現することを実践している人物、中でもとりわけ当歌群の一時形成に係わつた山上憶良が、題詞筆者として想定できることについて述べた。

【注】

注1 以下、「万葉集」の引用はすべて「日本古典文学全集」(小学館)に拠る。なお、巻一―巻九に関しては新編同上書を使用した。

注2 『万葉集の構造と成立』上 古代和歌史研究1(昭和四十九年九月三十日・塙書房) 九五頁

注3 稲岡耕二氏「有間皇子の自傷歌(巻二・一四一と一四二)」(『国文学解釈と鑑賞』五一巻二号・昭和六十一年二月) 人麻呂の場合は「死に臨む時」とも書かれているので事情は明らかである。皇子歌も死に深くかわる作として理解するほうが自然であろう。(略) 編者も事件に関わりのある作品と考えていたはずである。

など。

注4 中西進氏「梅原猛氏『水底の歌』解説」(梅原猛著作集第十一巻『水底の歌』昭和五十七年一月十五日)

自傷歌はこれ(巻二・一四一、一四二、二二三、卷三・四一

六) 以外万葉に存在しないし、臨死の歌もこれ以外にない。

ともに臨終に際しての自傷歌といってよいだろう。ところが
いうまでもなく、有間も大津も刑死者である。右の三首は、
ともに臨刑詩であった。どうして人麻呂だけが例外でありえ
ようか。
など。

注5 引用は、萬葉集叢書第五輯『萬葉集攷證』（古今書院）に拠
る。

注6 一四一番歌題詞語注

注7 「柿本人麻呂の臨死自傷歌」（大東文化大学「日本文学研究」

一三三号・昭和五十九年一月）

注8 「文選」の引用は「全釈漢文大系」（集英社）に拠る。

注9 「玉台新詠」の引用は「新釈漢文大系」（明治書院）に拠る。

注10 「芸文類聚」の引用は「芸文類聚」（上海古籍出版社）に拠
る。

る。

注11 「史記」の引用は「新釈漢文大系」に拠る。但し例Nに限り、

「和刻本正史」（汲古書院）を使用した。

注12 「漢書」の引用は「和刻本正史」に拠る。

注13 「後漢書」の引用は「和刻本正史」に拠る。

注14 「日本書紀」の引用は「日本古典文学大系」（岩波書店）に

拠る。

注15 「懷風藻」の引用は「日本古典文学大系」に拠る。

注16 巻九・一六七三番歌左注による。

注17 「新潮日本古典集成」一四四番歌頭注には

作者未詳、または前歌と同時の作か未詳の意か。

とある。

注18 「有間皇子自傷歌をめぐって」（『万葉集を学ぶ』第十四集

（昭和五十二年十二月二十五日・有斐閣）

注19 注2に同じ

注20 史書の利用については、芳賀紀雄氏「万葉集比較文学事典」

（別冊國文學『万葉集事典』平成五年八月）を参照した。

注21 「遊仙窟」の引用は八木沢元訳注『遊仙窟全講』（昭和四十

二年十月三十日・明治書院）に拠る。

注22 桜井満「有間皇子の「結び松」」（『万葉集の風土』（昭和五十

二年十二月二十日・講談社現代新書）には

あるいは、万葉の挽歌の冒頭を飾る有間皇子悲劇の挽歌群は、
岩代の結び松の歌として、この憶良の「類聚歌林」に類聚さ
れていたものだったのかもしれない。

との指摘もある。